

べたがけ資材の被覆がニンジンの抽台および収量に及ぼす影響

藤崎成博・鮫島國親  
(鹿児島県農業試験場大隅支場)

Akihiro Fujisaki and Kunichika Sameshima:  
Effects of growing in nonwoven on carrot flower stalk development and yield

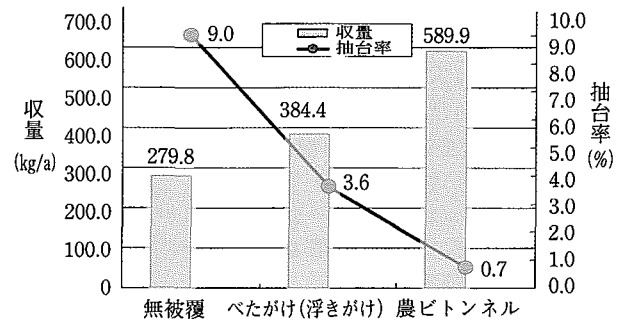
ニンジンの4～5月どり栽培は、現在11月下旬～1月上旬は種の農ビおよびPO系フィルム被覆のトンネル栽培が主体であり、収量・品質は、安定しているが、資材費、労力の面でコストがかかる。また最近輸入増加等で価格が不安定になり、県内、県外産地の栽培が減少してきている。一方、露地マルチ栽培では、抽台の発生が多く、生産が不安定である。そこで、資材、労力のコスト低減および春どり栽培の生産安定の面から、低コストで簡易なべたがけ資材(不織布)を利用した4～5月どり栽培技術を確立するため、べたがけ資材被覆が抽台および収量に及ぼす影響について検討した。

1. 材料および方法

供試品種‘向陽二号’、‘秋陽五寸’。2000年度は、栽培法の比較として11月20日は種で、間引き後(3葉期)べたがけ栽培、農ビトンネル栽培および、無被覆栽培区を設けた。また、は種期の試験として10月30日、11月13日および、11月20日の各は種期について、べたがけ栽培区と無被覆栽培区を設けた。さらに、べたがけ資材の被覆法の比較として11月13日は種で浮きかけ区および直がけ区を設けた。2001年度は、11月1日は種で被覆期間の比較として間引き後から3月18日まで被覆区および4月26日(第1回収穫期)まで被覆区を設けた。また被覆法の比較として浮きかけ区および、直がけ区を設けた。

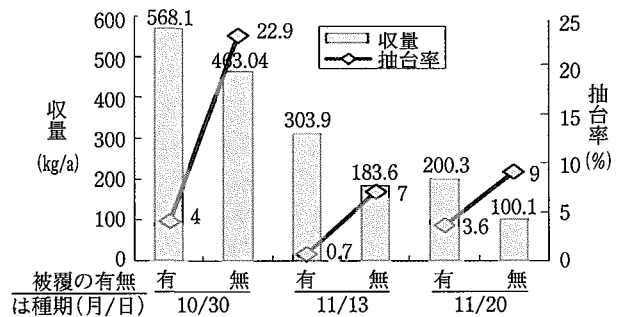
2. 結果および考察

2000年度11月20日は種、1月22日～4月18日(収穫期)までの被覆では、べたがけ区は農ビトンネル区に比べて抽台率がやや高く収量がやや低かったが、無被覆区に比べると抽台率が低く収量が高かった(第1図)。晩抽性の‘秋陽五寸’では10月30日、11月13日、11月20日のいずれのは種期も間引き後～4月18日までの被覆で、べたがけ区は無被覆区に比べて抽台率が低く収量が高かった(第2図)。また2001年度11月1日は種の4月26日までのべたがけ資材被覆区では、無被覆区に比べて収量は高いが、抽台率の差は認められなかった。一方、4月収穫の約1か月前の3月18日まで被覆区は、無被覆区に比べて抽台率が低く、収量が高かった(第3図)。被覆法の違いによる収量差は認められなかった(第4図)。以上の結果ニンジンの10月下旬～11月中旬は種4月収穫において、間引き後のべたがけ資材被覆による抽台抑制効果および100kg/a前後の増収効果が認められた。



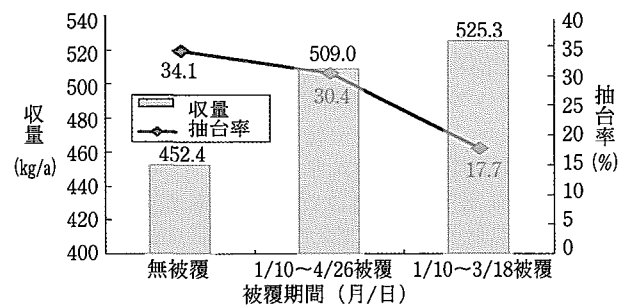
第1図 被覆資材の種類が抽台率・収量に及ぼす影響 (2000年)

注) べたがけ資材:ワリフ, 品種:秋陽五寸。



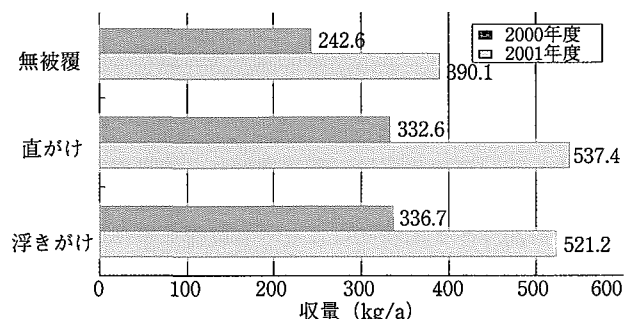
第2図 は種期、被覆の有無が抽台率・収量に及ぼす影響(2000年)

注) べたがけ資材:ワリフ, 品種:秋陽五寸, 被覆法:浮きかけ。



第3図 被覆期間が抽台率・収量に及ぼす影響 (2001年)

注) べたがけ資材:パオパオ90R, 品種:向陽二号, 被覆法:直がけ。



第4図 被覆法が収量に及ぼす影響 (2000, 2001年)

注) べたがけ資材:パオパオ90R, 品種:向陽二号。